

2011 年度前期経済学部 定期試験実施科目 講評

科目名（ 経済学史 ） 担当者（松尾 匡）

授業日：曜日（水）時限（1）

解説および解答の傾向

解答については、担当者の個人ホームページの「講義・演習」

<http://matsuo-tadasu.ptu.jp/kougi.html>

を参照されたい。本講評もそこに掲載している。

大問 II は正解が十分でなかったので解説する。

⑱ スミス

大問 I の正答率がほぼ 100%に近かったにもかかわらず、このような、これ一つできないだけで不合格としてもいいような基本的な設問の正答率が、わずか 22.3%しかなく、理解を疑わせる。

「貿易黒字を増やせば国が豊かになる」というのが重商主義の中心的主張で、これを批判することがスミスの大目的だったわけなので、「貿易黒字が増えるので国が豊かになる」としている(2)と(3)は明らかに誤選択肢。それなのに(2)が 48.7%もあった。

スミスに始まる経済学の主要な論者が「競争」を説くのは、社会的ニーズの少ない部門から多い部門に生産資源が移動することで、必要なものが必要なだけ作られるためである。怠けたら貧しくなるようにするためではない。ここに「国際競争力」などという発想もない。よって(1)も(3)も誤り。

⑳ リカード

正解(1)は 44.8%。比較生産費説のことである。(2)は「平均して」が間違い。最劣等地で投入される労働によって決まる。(3)は全くリカードは言っていない。(4)は 32%もあったが間違い。リカードが資本蓄積進行で利潤率が低下すると考えたのは、地代が増大して利潤を浸食するから。リカードはセイ法則を信じているので、「総需要不足」という発想はあり得ない。

㉑ マルクス

正解(1)は 70%。引っかけ問題の性格が強い設問と思ったが、II で一番正答率が高かった。(2)は、21.5%あったが、資本主義経済での長期均衡価格は「生産価格」になるというのがマルクスの主張なので違う。(3)はデューリングらの主張でマルクスはこれを批判した。(4)は資本主義体制を前提した福祉国家などの主張。

㉒ ワルラス

正解(4)は 19.6%しかなく、II で一番正答率が低かった。ワルラスが社会主義をめざしたことは、テキストでも授業でも強調したところ。(1)は 17.1%あったが、「自由放任では自由競争は実現できない」というのがワルラスの主張。(2)は「平均」ではなくて「限界」。(3)が 56.8%もあったが、「諸財の超過需要の和はゼロ」というのは「セイ法則」。ワルラス法則は「諸商品の超過需要の和はゼロ」で、「諸商品」には、貨幣も含まれる可能性がある。

㉓ マーシャル

(1)は、マーシャルは古典派価格論を需要供給理論の中に取り入れたので間違い。(2)が正解で、正答

率 69.5%あった。(3)は 21.3%あったが、市場均衡は社会的余剰を最大化するが、貨幣の限界効用は一定ではないので、これが社会全体の効用を最大にしないというのは、マーシャルが強調していたところ。(4)は、「限界費用」というのは「最大費用」という意味ではないので間違い。

④ ケインズ

(1)はよくあるマクロ教科書の俗説であるが、授業でもテキストでも間違いであることを強調した。16.2%が選択。(2)は「ワルラス法則」が間違い。「セイ法則」。(3)が正解で正答率 66.8%。(4)は古典派や新古典派の「貨幣数量説」で、ケインズはこれを批判した。

配点・評価基準と不合格分布

大問 I と、大問 II の得点の落差が激しく、大問 II で理解度が判定できると思われるので、その比重を高めることにした。すなわち、I は一つ 3 点、II は一つ 7 点とし、II の⑤の分は全員に 4 点を出した。これで素点を計算し、A+、A、B は、所定の基準にしたがって判定した。素点で 60 点に満たなかった者は、出席を 1 回 1 点として 60 点に至るまで加点し、その結果 60 点以上 70 点未満の者を C、60 点未満の者を F とした。

F 評価の者は受験者 591 名中 4.23%であった。このうち、出席数は最大の者でも 4 回で、いずれの者も大学の定める 3 分の 2 の出席基準に満たない。

ちなみに、A+は 11.5%、百点は 8 人いた。